

インターンシップで学んだ自分の無力と人の優しさ

山本美咲（東北公益文科大学公益学部2年）

3週間の短期留学を終えてから、私は3月12日から16日の1週間、オークランドでインターンシップをした。私はインターンシップの方が留学よりも不安だった。何故なら、今回の留学でインターンシップを行うのが私一人だったからだ。留学では大学に行けば友達がいたので、日本語を話せて英語を話すことが苦にはならなかった。しかしインターンシップは留学と違い、職場でもホームステイ先でも全部英語で話さないといけないという英語環境だった。1週間は短いようで、私には長い1週間だった。私はこの短い英語環境の生活で、留学では学ぶことのできなかった、人間として社会人として大事なことを学んだ。インターンシップは、自分自身を変える大きなきっかけとなる経験であった。

私が体験した職種は社会福祉のなかでも、介護職だった。介護職は高齢者の食事などの生活の介護を主にする職種で、現在高齢化社会にある日本で最も必要とされている職種である。私はインターンシップで、介護の大変さと英語の難しさを感じた。そして、人生で初めて英語を話すことへの絶望を味わった。自分の英語力のなさを感じたのである。その体験をこれから記したいと思う。



私のインターンシップ先はLady Ascot Rest Homeという女性だけの老人ホームだった。決して大きい施設ではなく、家のような施設に10人くらいのおばあちゃんたちが生活していた。この施設に初めて行ったとき、アットホームな雰

困気が日本とは違うと思った。Rest Home では、10 人の利用者を基本的に 2 人で介護していた。10 人のおばあちゃんたちの中には自分のことは自分でできる人もいれば、人の手を借りないといけない人もいて、差が大きかった。1 週間の午前と午後それぞれに予定が組まれていて、歌やダンスそしてドライブに行くなどおばあちゃんたちが毎日楽しめるようになっていた。

初日、私はインターンシップ先で OKC の人と待ち合わせをしていた。インターンシップ先は、ホームステイ先からバスで 15 分、歩いて 30 分で行けるところだった。道も覚えやすく、ホストファミリーから前日にバスと道については教えてもらったので安心していった。しかし、初日私はバス停を間違えてしまい、遅刻してしまった。OKC に連絡をしたが、繋がらずとにかく急いで職場に向かった。職場に行くと、OKC の方がすでに待っていて、遅れたことを注意された。初日から遅刻をするなんて、普通に社会人として働いていたら大変なことになっていたと実感した。それから OKC の方と一緒に簡単な説明を受けた。OKC の方と派遣先の担当者(Laima)が早い英語で話していたが、大体聞き取れた。説明は 5 分程度で終わり、心の準備もできないままインターンシップが始まった。初日は緊張ばかりで、おばあちゃんたちやスタッフとあまり会話ができなかった。ただ黙ったままで、話しかけられたことに微笑むことや、短い返事しかできなかった。何を話せばいいのか、自分の感情がどう話せば伝わるのかと、そんなことばかり考えていた。そのためインターンシップ初日はあまりいいスタートではなかった。不安ばかりが募って、ホストファミリーに相談しようと思ったが、留学の時のホストファミリーとは違い、打ち解けることができず、自分から話すことができなかった。

不安を抱えたまま、2 日目を迎えた。2 日目からはお金をかけたくな

かったので、歩いて職場に向かった。今日こそは間に合う予定が、5分くらい遅刻してしまった。5分くらいなら大丈夫かと思っていたが、職場に着くと OKC の方から電話がきていた。電話の相手は、OKC で私のインターンシップの担当をしてくれていたさおりさんだった。さおりさんからの電話で遅刻したことを注意された。2日も遅刻した理由を聞かれ、遅刻はいけないと強く言われ、遅刻は社会人としてはいけないことだと実感した。それから初日のことを聞かれ、話しているうちに涙が出てしまい、電話をしながら泣いてしまった。ニュージーランドに来たら絶対泣かないという決意は、ここで終わった。頭の中が混乱してしまい、泣くことしかできなかった。そんな私にさおりさんは、インターンシップを辞めるかと聞いてきた。私はインターンシップを辞めるという気持ちはどこにもなかった。たくさんの人のおかげでインターンシップという貴重な経験ができているだから、この貴重なチャンスを今ここで諦めたら絶対後悔する。私はさおりさんにインターンシップは辞めないと伝えた。最後まで頑張って乗り越えたいと強く思った。2日目はこのまま仕事を続けるのが難しかったので、2日目だけ午前で終わらせてもらい、午後は OKC 事務所に向かうことにした。職場で泣いてしまったので、スタッフの方やおばあちゃんたちにとっても心配された。電話が終わってから Laima が私の話を聞いてくれ、励ましてくれた。Laima に「みさきはシャイだから、もっと話して。おばあちゃんたちと色々な話をしてあげて。」と言われた。Laima の話を聞いて、介護の仕事は介護をするだけでなく、会話をすることも大切だと改めて感じた。些細なことから会話をすれば、話が盛り上がり、相手のことも知れるのだと思った。インターンシップが始まって2日目で私は英語での絶望を味わった。また自分の英語力の無さを実感した。自分の力の無さのせいで、多くの方に迷惑をかけたことをとても申し訳なく思った。同時に、泣いた私をス

スタッフのみんなが励ましてくれたので、人の優しさを感じた。2日目の午後は、OKC 事務所に行った後、街で買い物をして気分転換をした。気分転換ができたので、気持ちが落ち着き、残りのインターンシップを乗り切ろうと決めた。

帰宅してからは、3日目から自分のやるべきことを考えた。高齢者の方は、日本人と同じで、何度も同じ話をしたり、はっきりゆっくりと大きい声で話さないと聞き取れない人がたくさんいる。それが英語となると日本語で話すよりも難しいことである。そこで私は、紙を使って、英語を書きながら話をすればいいのではないかと考えた。考えたことは実行しようと思い、3日目からはメモ用紙とペンを持っていくことにした。また、自分からいろいろなことを聞いて相手のことを知ることと、スタッフにもおばあちゃんたちにも笑顔であいさつをすることを決めた。

3日目からは自分が決めたことを実行した。紙を使って会話をすると、会話が弾んだ。名前や誕生日や好きなことなど、相手のことを知るためにいろいろな質問をして会話をした。また自分のことも話した。すると、おばあちゃんたちは笑ってくれた。こんな些細なことで人は打ち解けることができるのだと、コミュニケーションの大切さを改めて感じた。おばあちゃんたちと会話をするだけでなく、食事の配膳や介助、ベッドメイキングなどちょっとした介護の手伝いもした。おばあちゃんたちは私が食事を渡したりする度に、毎回「ありがとう。」と笑顔で言ってくれた。その時、私は人のために自分が何かをすることはとてもいいことだし、人に感謝される仕事はいいと思った。介護の仕事をするだけでなく、おばあちゃんたちと一緒にドライブや歌も楽しんだ。スタッフも一緒に楽しんでいる姿を見て、この施設はとても温かいところだと思った。

こうして短いようで長い1週間のインターンシップが無事に終わった。私はインターンシップを通して、自分の無力さを実感した。日本語

を全く話せないカルチャーショックに陥り、私にとってはとても大変なインターンシップだった。このインターンシップで私は自分を見つめなおし、向き合うきっかけができた。自分の弱さを目の前に突き付けられ、自分と戦った経験だった。

私はこのインターンシップでたくさんの人と出会った。その中で、1人の女性が私の中で1番印象に残っている。その女性は20歳のAshlynである。AshlynはRest Homeで働きながら、看護師になるために大学に通っていた。私は日本に帰国する前日が休日だったので、Ashlynにオークランドガーデンに連れて行ってもらった。年が近いこともあり、たくさん話をした。Ashlynはアジア人で看護師になるためにNZに来たそうである。年が一つしか変わらないのに、働きながら大学に行っているなんて驚いた。私はAshlynと話をして自分の努力の足りなさを痛感した。Ashlynとの出会いは私にとってとても大きなものだった。オークランドで年の近い友達ができるとは思ってもいなかったので、とてもうれしかった。私もAshlynのように、自分の夢に向かって頑張ろうと思った。

私が無事にインターンシップを乗り越えられたのは、自分の力ではなく、家族や友達の応援、松田先生や伊藤さんそしてOKCの方々のサポート、そしてRest Homeのスタッフの優しさや支えがあったからである。おかげで私はインターンシップで人生の貴重な体験ができた。一人でのインターンシップは不安でいっぱいだったが、自分にとってこれから大切なことを多く学んだ経験だった。

私の体験談を読み、インターンシップを辞めようと思う人がいるかもしれない。しかし、私はインターンシップを考えているなら行くべきだと思う。失敗はたくさんするかも知れないが、きっと留学よりも良い経験になると思う。インターンシップを迷っている人は、やってみるべき

だと思う。一人でもやってみることが、自分の大きな成長につながるだろう。

私はこれからこの経験を無駄にはせず、自分の目標に向かって一生懸命頑張りたい。そして将来たくさんの人の助けとなり、たくさんの笑顔を与えられるような人になりたい。

最後になりますが、私に貴重なインターンシップを経験させていただきありがとうございました。